

平成28年度「JA青年組織手づくり看板全国コンクール」審査講評

全国農協青年組織協議会が主催する平成28年度「JA青年組織手づくり看板全国コンクール」には、全国27都道府県から67作品（看板部門55点、アート部門12点）の応募があり、平成29年1月23日（月）に東京・大手町のJAビルで審査委員会を開催しました。作品募集テーマは昨年同様「農業のある地域づくりの大切さに関する地域住民へのアピール」とし、インパクト（設置場所選択を含む）、内容、デザインなどの審査基準に基づき審査を行いました。

なお、審査委員は、全国消費者団体連絡会、JA全農、JA共済連、農林中央金庫、日本農業新聞、家の光協会、農協観光、JA全中の各団体からお集まりいただいた広報担当の職員など8名の委員で審査を行い、審査委員長は互選により、全国各地の青年部活動を取材し、記事として取り上げていただいている雑誌『地上』の編集長である山本 樹氏が選ばれました。

審査の結果、最優秀賞には「津軽みらい農協青年部 松崎支部（青森県）」の作品が選ばれました。たくさんのキャラクターが「青天の霹靂」の上に乗ったデザインで、大変かわいらしい作品となっており、地域の「おいしいもの」をいっぱい食べてほしいというメッセージと、生産者としての自信が伝わってきます。また、明るい色使いやまとまった構図が目を引き、看板として大変見やすい作品である点も評価されました。地域住民に対し、地場農産物の魅力、地域の農業の魅力をストレートに訴えかける点が本コンクールのテーマと合致し、最優秀賞に相応しい作品と多くの審査委員から評されました。

アート部門賞には「あいら伊豆農協青壮年部（静岡県）」の作品が選ばれました。廃材で作られた案山子、本物の土等を使って作られたこの作品は、泥にまみれての作業の中に生産者の努力や情熱、美しさが存在するという、まさに農業を象徴するかのような主題が心に響きます。土を手で塗り付ける等手作り感にもあふれている点も評価されました。この作品は直売所に設置されており、多くの消費者に生産者の想いをアピールすることができる点も評価され、アート部門賞に相応しい作品として多くの審査委員から評価を受けました。

（各特別賞について）

○ 全国消費者団体連絡会賞「三次農業協同組合青壮年連盟（広島県）」

広島東洋カープの全国優勝にかけて、三次の野菜をアピールするデザインとなっており、全国消費者団体連絡会の小倉氏は「県全体が盛り上がる中、その盛り上がりを農業分野にもつなげてほしい」と期待を寄せました。

○ J A全農賞「J A庄内たがわ青年部 櫛引支部（山形県）」

伝統的な稲刈り装束に身を包んだ女性たちとお米のキャラクターがデザインされ、楽しい雰囲気作品です。「うめえごはんて元気いっぱいほらいっぱい」というシンプルなメッセージを通じて、幅広い年代に地元のお米のおいしさを伝えている点が評価されました。

○ J A共済連賞「みやぎ仙南農協川崎地区青年部（宮城県）」

子どもたちが笑顔で田植えをする姿を鮮やかな色使いで表現した作品で、子どもたちと食農の学びを通じて地域の未来を作るというメッセージが、本コンクールの「農業のある地域づくり」というテーマと合致し、高く評価されました。

○ 農林中央金庫賞「J A西三河青年部（愛知県）」

戦隊ヒーローに扮した青年部役員が地場農産物をPRするデザインで、親しみやすいキャラクターと勢いのある構図が目を引きまます。また、大規模な直売所の前に設置されており、消費者へのアピールとして効果的であると評されました。

○ 日本農業新聞賞「J A加美よつば青年部小野田支部（宮城県）」

野菜でできた龍の背中に乗る少年をデザインした作品で、躍動感にあふれた構図が特徴的な作品となっており、少年が地域に未来の種を蒔いているというストーリー性の高さに加え、文字の視認性が高い設置方法も評価されました。

○ 地上賞「秋田おぼこ農業協同組合青年部 西仙北支部（秋田県）」

収穫を終えて休憩する女性の笑顔から、収穫の喜びや達成感が感じられる作品であり、作り手の心情を表現する切り口の新鮮さが評価されました。審査委員からは、女性をメインにした構図が魅力的との評価もありました。

○ 農協観光賞「J Aあまみ青壮年部協議会 和泊支部（鹿児島県）」

“黒”の一文字を中心に個性豊かな『黒福神』を配置し、鹿児島県内の様々な特産品をアピールする作品となっています。特産品を擬人化するという発想の面白さや、メリハリの効いたデザインが多く審査委員から評価されました。

○ J A全中賞「伊万里市農業協同組合 南波多支所青年部（佐賀県）」

農業を営む楽しさ、嬉しさが看板いっぱいに表現されており、今にも男性の「最幸！」という声が聞こえてきそうな作品です。地域の方々に広く農業の魅力を訴求していく作品として高く評価されました。

(総評)

今回のコンクールに寄せられた作品も、その一つ一つが個性的で、地域の状況を踏まえて制作されていることが伝わってきました。印象的なメッセージや、ストーリー性のある作品も多く、それぞれの作品から盟友の熱い想いを感じました。

昨年に続き本年度もデザインに秀でた作品が多く、各々が優良事例を研究し、思いを伝えるための工夫をしていることが見て取れました。その中でも、今回の受賞作品を振り返ると、青年部盟友同士で議論を交わし、地域へ伝えたいメッセージを明確にした上で、その思いを伝えるためのデザイン、設置方法等を工夫して訴求効果を高めた作品が評価を受けていました。

作品そのものの大きさについては、盟友が一致団結して制作に取り組んだことが伝わってくるような大きな作品を期待する声も寄せられました。屋外に設置する場合は、遠くからの視認性も重要となります。来年度はぜひ、大きな作品にチャレンジしてみたいかがでしょうか。

審査では、看板部門・アート部門にかかわらず、テーマである「農業のある地域づくり」を実現するために「どうメッセージを伝えているか」という点が最大の評価ポイントとなりました。その基準として、設置場所が効果的かどうかも重視されていました。現在、看板作品はJA関連施設や農地に掲示されていることが多いのですが、JA関連施設以外にも積極的に働きかけ、看板を設置することで、より幅広いアピールを行うことができます。看板を作成するだけでなく、その設置場所についても議論を重ねていただければと思います。

その他、デザインの親しみやすさ、地域の特徴を取り入れているかどうか等が受賞の決め手となりました。

今回応募された作品をきっかけに、地域住民の食と農に対する理解が深まり、それぞれの地域で住民と一体となった取り組みにつながることを願うとともに、盟友と協力して看板の制作に取り組むことで、絆が強まり、青年部の活動もより活発化していくことを期待しております。

今後も本コンクールの開催が各地盟友の看板制作の励みになること、そして青年部の看板・アート作品が全国各地に広がり、日本農業・地域社会の情報発信源となることと確信しております。

【審査委員】(敬称略)

山本 樹<審査委員長> (家の光協会・編集本部地上編集部 編集長)、小倉 寿子 (全国消費者団体連絡会・政策スタッフ)、久保田 治己 (全国農業協同組合連合会・広報部 部長)、上野 温司 (全国共済農業協同組合連合会・調査広報部 次長)、木村 吉弥 (農林中央金庫・総合企画部 広報担当部長)、行田 元 (日本農業新聞・広報局事業開発部 部長)、齋藤 充利 (農協観光・営業企画部 部長)、樋口 直樹 (全国農業協同組合中央会・広報部 部長)